

趣旨説明

西 芳実 立教大学

東南アジア学会の東洋研究大会(2010年11月25日、立教大学)
「パネルの学術研究と人道支援—2009年西スマトラ地震で壊れたもの・つくられるもの」

第一部 被災と復興支援

趣旨説明

西芳実
(立教大学・AHC)

4. パネルの構成

事例と構成・論点
 * 山間地域(バダン/バリヤマン県)の被災 * 緊急・復興支援
 * 現地活動団体+事業本部 * 西スマトラ研究+紛争・開発・援助研究

第一部 被災と復興支援

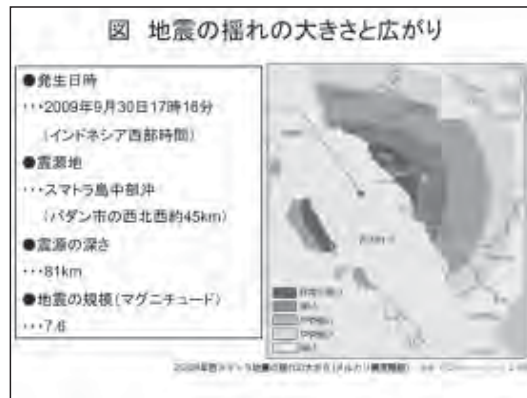
「流動性の高い社会における被災と復興」(西芳実)
 「SNS国際防災支援センターによる被災と復興」(今井弘)
 「アジア協会アジア友の会(JAFS)による「安全な水の確保」(事業)」(藤原健男)
 「日本の復興復興支援事業までどう評価するか」(早川愛香)
 コメント: 山本直香、コメント2: 手計太一

第二部 流動性の高い社会における知の伝達と変容

パネル: 野村愛奈、山田佳子、青山和任、石井正子、福武儀太郎
 謝会対象

1. 問題の所在

- ・ 災害・・・社会の潜在的な課題に取り組む契機
 ×「被災前の状態に準ずる」○「被災を契機により高い状態にする」
 被災前の状況を含めた社会全体についての理解が不可欠
- ・ 研究者は人道支援にどのように関わるのか
 「募金から情報提供へ」・・・どのような情報か？
 研究の情報はそのままでは実用に通さない？
 実務との関わりは学術研究にとって重要？
- ・ 本パネルのアプローチ
 社会についての理解・研究 ≠ 災害時の社会・対応
 災害時の社会を見ることを通じた学術研究の発展



2. 災害時の社会

- ・ 社会が潜在的に抱える課題が目の前に明らかな形で現れる場
 ...平時の社会と震災の関係にある場
 社会を全体的にどのように把握するか
- ・ 外来の思想・技術・制度・文物と在地の秩序・論理との相互作用の場
 ...イスラム教、植民地統治、国民国家体制etc.
 自律的な東南アジア史像をどう描くか

⇒東南アジア(史)研究の課題に即して
 社会についての理解を深めうる場

表 被害状況(西スマトラ州)

県・市	死者数 (人)	被災家数 (棟)	帰宅困難 (棟)	原居喪失率 (%)
バダン/バリヤマン県	666	83,463	86,690	96
バダン市	383	76,045	178,970	42
アガム県	81	16,287	112,029	15
バリヤマン市	48	10,252	17,124	80
南プシシル県	9	7,583	112,387	7
西バサマン県	5	6,286	78,236	8
ソロク市	3	0	0	0
前計	1195	199,916	585,436	

出典: 気象庁防災センター(2009年9月30日)「2009年9月30日スマトラ島中部沖地震の震度分布(震度1以上)」(震度別震害情報) © 気象庁

3. 東南アジア学会の取り組み

- ・ 2009年西スマトラ地震(2009年9月30日)
 死者1195人(西スマトラ州)
 うちバダン市(383人)、バダン/バリヤマン県(666人)。
- ・ 東南アジア学会緊急研究集会(2009年11月25日)
 「支援の現場と研究をつなぐ—2009年西スマトラ地震におけるジェンダー、コミュニティ、情報」
 * 都市部(バダン市)の被災
 * 緊急支援
 * 現場入りした支援団体
 * 西スマトラを研究対象とした研究者

第一部 被災と復興支援 趣旨説明

西 芳実 立教大学


立教大学学生会の協賛により2019年6月6日、立教大学
（中丸）で「復興支援と人道支援—2009年西スマトラ地震被災地から—」を開催する。

流動性の高い社会における被災と復興 —2009年西スマトラ地震被災地の事例から—

西 芳実
(立教大学・AICC・助教)
nishi@nikkyo.ac.jp

3. 被災前の社会の課題②

- ・ **ミナンカバウ社会**
母系制。女が土地・家屋を所有・相続。
男は外の世界に出稼ぎ。
- ・ **生業と住居**
核家族化と独立家屋への居住
地域に主たる産業がない
(例) 農業・漁業労働、建築作業請負、小売業etc.
地元の成年男子…出稼ぎに行けなかった/出て戻った
(例) 建築に関する専門性の限界、生計と住居の不安定



1. はじめに

- ・ 災害…社会の潜在的な課題に取り組む契機
「被災地の課題に真摯」の「被災を契機によりよい状態にする」
被災前の状況を含めた社会全体についての理解が不可欠
- ・ 社会全体の理解(=災害を見る・災害に対応する)
インドネシアの特徴…流動性の高い社会
ボランティア社会の顕在化
西スマトラにおける被災前の課題
①衛生的な水の確保の困難
②建築に関する専門性の限界、生計と住居の不安定
cf. 個別社会の理解度の違い

4. 被災と復興の様相

- ・ 西スマトラ地震で被災前の課題が顕在化
住宅の倒壊、貯水槽の損壊
大規模な地崩れ、道路の崩落
- ・ 復興過程における域外からの関与・働きかけ
域外居住のミナンカバウ人を通じた募金と支援活動
インドネシア各地からの「ボランティア」
国際的な救援復興活動
- ・ 被災前の課題に対応した支援事業
「安全な水の確保」事業(課題①) 刺繍技術講習会(課題②)
——技術・知識・思想を伝達・普及する試み——

2. 災害対応におけるインドネシア社会の特徴

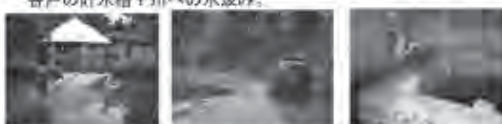
- ・ **流動性の高い社会**
住居・生業の移動・変遷
コミュニティの成員は流動的、多様な社会的文化的背景
—緊急段階と復興段階が同時期に開始
—固定的・自立的なコミュニティ像にもとづく働きかけとのズレ
- ・ **ボランティア社会の顕在化**
支援事業の専門性と土地勘をもつ国内ボランティア
支援者の管理を踏まえて対応する現地社会
—域外のアクターを前提にした復興過程
- ・ 西スマトラではどうだったか？

おわりに

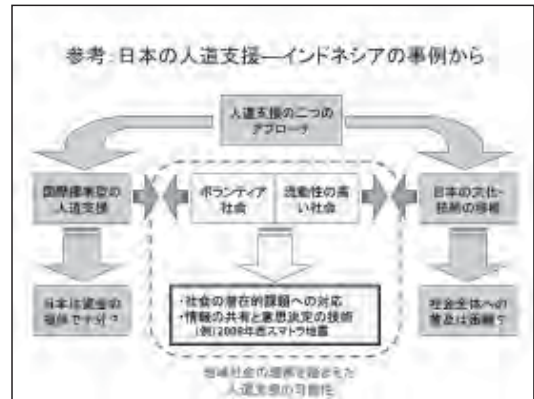
- ・ 西スマトラ地震の被災と復興
被災前の課題の顕在化(水、生業と住居)
被災を契機にした域外からのさまざまな関与・働きかけ
外来の技術・知識・思想の伝達・変容・定着の場
- ・ 流動性の高い社会における被災と復興
現場で…情報共有や意思決定をどう行なうか
知の伝達…「うまくいかない」ことにはどう対応するか
事業として…社会の形が動き続けるなかでどう評価するか
cf. 個別社会の理解度の違い
時間と空間の広がりの中で…被災と復興をどう位置づけるか

3. 被災前の社会の課題①

- ・ **バダンバリアマン県**
内陸部山地～沿岸部 複数の川と川に挟まれた尾根
雨季(9-12月ごろ)。水が特定の地域・時期に集中
- ・ **衛生的な水の確保**
水籠・地崩れを避けて尾根に居住。
各戸の貯水槽+川への水汲み。



1 前後からの洪水で浸水する道路 2 大雨による土石崩れで道路が閉じた道路 3 水籠を使って川の水を取水



SNS国際防災支援センターによる耐震技術普及事業

今井弘 SNS国際防災支援センター

東南アジア学会 研究発表 2010年9月21日 豊田大学 豊橋校舎

SNS国際防災支援センターによる耐震技術普及事業

—エンジニアとしての競争地、被災地でのNGOの取り組み—

西スマトラ州バダク・バリアマン地区における巡回建築指導事業

S 2

今井弘 SNS国際防災支援センター

組積造(煉瓦)の建設工法

① The brick masonry has been a lot in Indonesia (SP brick, wall 120mm thickness with double length) 80 Years → 100 Years with the last bearing wall → Confined masonry structure. → Collapse of wall of stone masonry in every room cause by horizontal direction of wall due to masonry brick → Construction of SP brick wall by 120mm, 120mm thick.

② The brick masonry has been a lot in Pakistan (British East Treatment of wall 220mm thickness length) The wall thickness is 100mm as last bearing structure. → Collapse of wall in every room, problem of vertical bearing capacity by height.

③ The brick masonry has been a lot in India (Threat Brick) Size of 2. Thickness of wall 220mm (double length). In high seismic region, addition of vertical bar and double bond is needed. The brick of Indian kind. Can't avoid but we need to consider with double bonding wire.

④ The brick masonry has been a lot in Iran (Red Brick) Size of 2. Thickness of wall 220mm (double length). This practice can be easily done by Iran masonry. It is easy to use and it is a good masonry. It is a good masonry. It is a good masonry.

Contents

西スマトラ州バダク・バリアマン地区における巡回建築指導事業

Key words

- 組積造(枠組み組積造)
- ノンエンジニアード建築
- 工学と現場のブリッジ構築

◇プロジェクト概要

◇建設工法の地域特性

◇これまでの活動、研究を通して

◇プロジェクト内容

煉瓦とセメントの価格比較

	Brick / piece	Cement / 50kg bag	Price / Unit	Ratio	Area
Indonesia	100%	25000%	42.3	100mm x 100mm	Yogyakarta
India	1.65%	400%	132	220mm x 100mm	Kalimantan
Pakistan	4.05%	400%	100	220mm x 100mm	Mulji/Rawal
Iran	1.25%	100%	132	220mm x 100mm	Guilan
Iran	250%	30000%	100	220mm x 100mm	Kerman

プロジェクト概要

西スマトラ州バダク・バリアマン地区における巡回建築指導事業(第1期)

※期間 2010年1月30日～4月15日(2ヶ月半)

※目的

被災地に生活する被災者に対して、安全な住宅を建設するための技術指導、また住宅再建を計画している住民に対しての支援活動を実施して、被災者に対する、被害の軽減に貢献するための理解を深めることを目的とする。

※コンポーネント

- ①巡回建築指導 (Architectural Advice Field)
- ②建築家トレーニング
- ③建築家向け調査セミナー

「地震防災に関するネットワーク型共同研究」

実証科学WJ社共同研究報告書

建築研究所が主体となり、インドネシア、ネパール、パキスタン、トルコのアジアの地震国4国の研究機関と共同で、地震被害の軽減に向けた取り組み

□ 期間 平成24年度より3ヵ年

□ 研究開発テーマ

- ◆Topic1: 建物のリスク管理システム
 - ①-1 コスト削減による地震リスク管理のためのコスト削減とリスク管理システムの構築
 - ①-2 地震リスクの軽減と被災者の救済
- ◆Topic2: 実践的な耐震工法の開発
 - ②-1 実践的な耐震工法のための調査研究
 - ②-2 実践的な耐震工法のための調査研究
 - ②-3 調査研究から得られた実践的な耐震工法
- ◆Topic3: 技術の社会への定着方策
 - ③-1 調査研究の成果を社会に伝えるための取組
 - ③-2 実践的な耐震工法の普及のための取組

組積造(煉瓦)における建設工法の地域特性

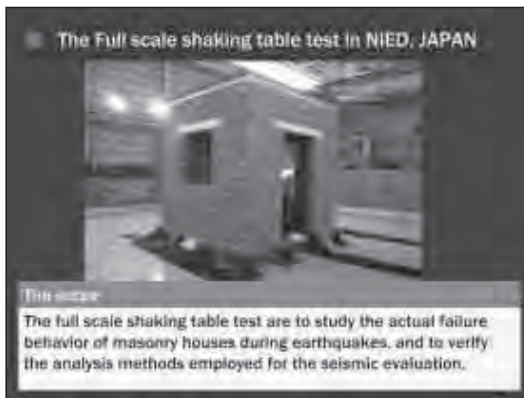
Earthquake / Construction method

Earthquake in Asia since 1900

□ Component 2-1: Study on Feasible and Affordable Seismic Constructions

「実践的な耐震工法の研究開発」 / 三重大学、東京大学共同研究、建築研究所

SHAKING TABLE TEST (実大揺動台実験)



Component 2-2:
Bridge between Engineering and Construction Works
 「工学と建設工事との間のブリッジ構築」

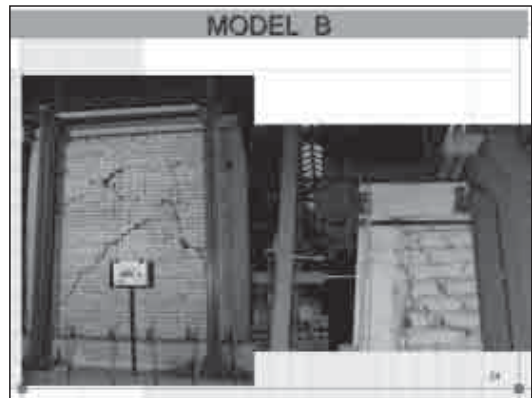
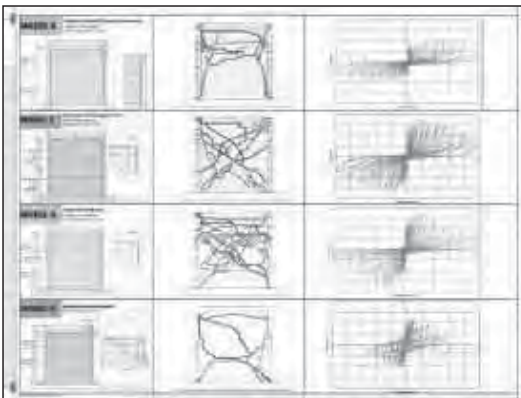
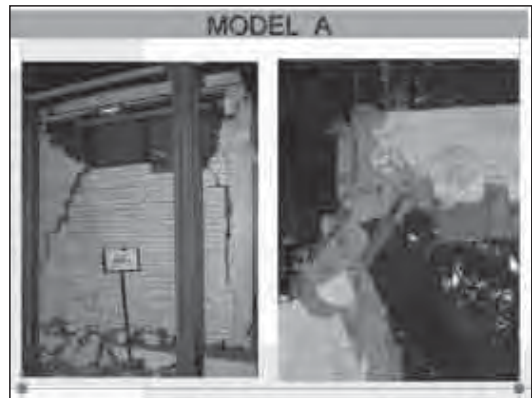
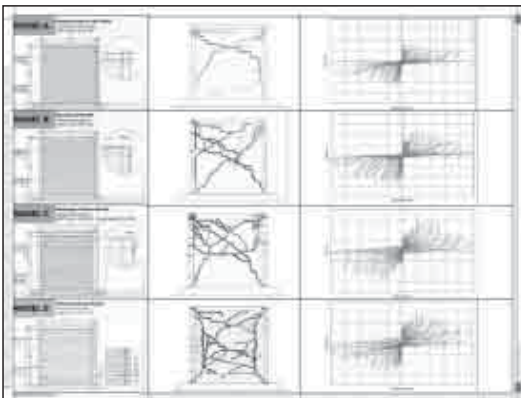
- Analyzing Construction Practices of Air-
 建設現場実態
 - Identifying Recommendations which could
 be accepted adopted by Local Workers
 地場労働者の受け入れ可能な提案

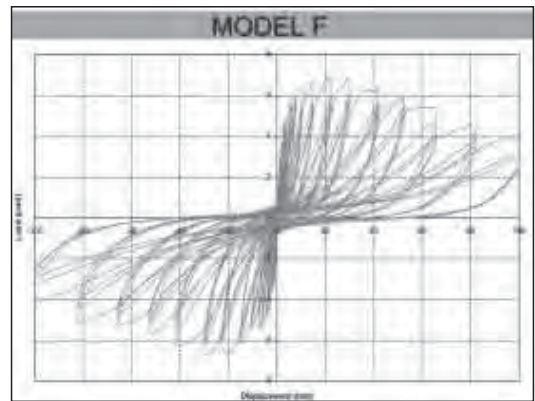
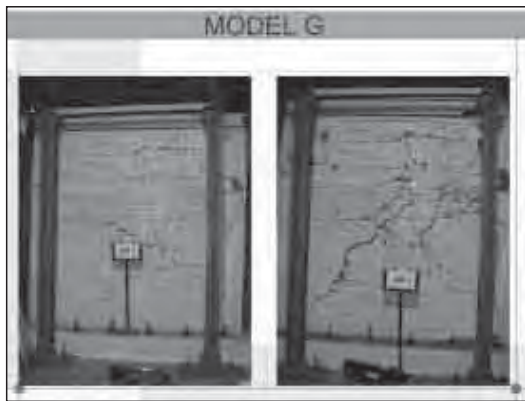
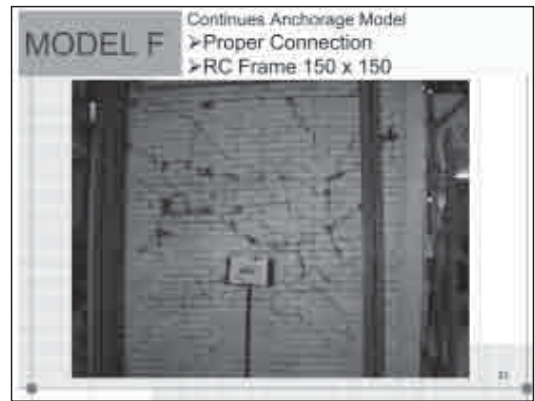
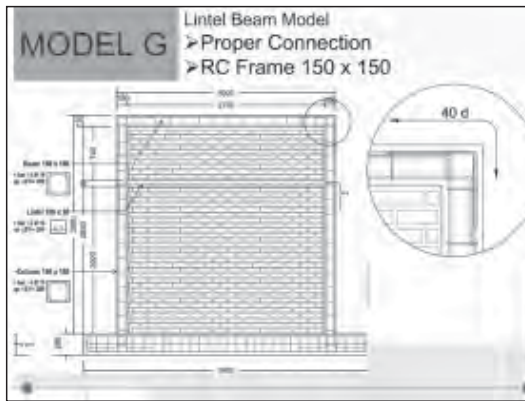
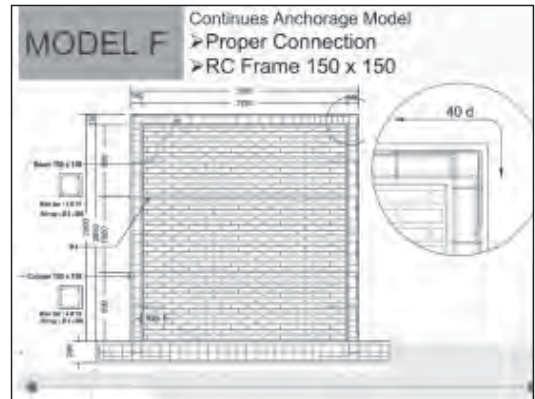
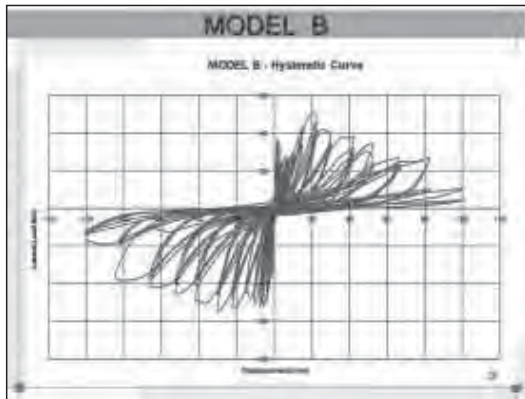
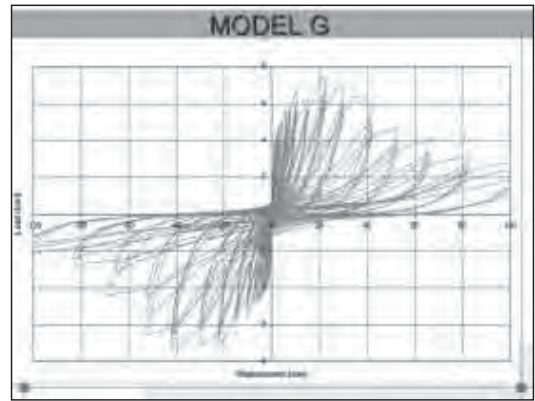
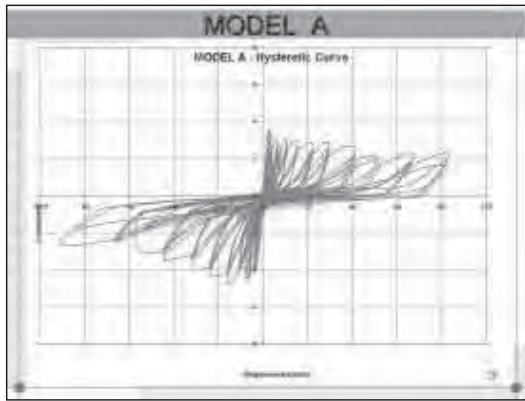
MODEL A Common type in the Field
 ➤ Un-Proper Connection
 ➤ RC Frame 100 x 150

壁体水平繰り返し加力実験

Nine specimens were Conducted at Research Institute Human Settlement (RIHS) Bandung, Indonesia

MODEL B Benchmark Model
 ➤ Proper Connection
 ➤ RC Frame 150 x 150









まとめ

- ▶ 今日実施した巡回建築指導第1期事業は、Feasibility study的な要素があり、特定地域に特化した形で実施した。(ナムリンコン村)
- ▶ 政府による住宅再建プログラムの開始が大幅に遅れているため、計画では巡回指導指導による住民・職人への指導であったが、地三政府との協議の結果、建築職人のトレーニングをメインとして実施した。
- ▶ 現在、住宅再建プログラムが開始され、建設ラッシュが始まっている。SNS 情報助成支援センターでは、第2期の巡回建築指導事業を4月末より8月中旬まで再開する予定である。

日本の救援復興支援事業をどう評価するか

早川香苗 特定非営利活動法人ジャパン・プラットフォーム

JAPAN PLATFORM

学術研究と人道支援:2009年西スマトラ地震で壊れたもの・つくられるもの

日本の救援復興支援事業をどう評価するか
-JPFのモニタリング・評価方法と課題-

(特活)ジャパン・プラットフォーム
早川 香苗

JAPAN PLATFORM

日本の救援復興支援事業をどう評価するか
-JPFのモニタリング・評価方法と課題-

○JPFのモニタリング・評価要領

【目的】 ステークホルダーへの説明責任、活動への教訓・提言等の提供
【主体】 JPF内部の者、外部専門家のいずれか、または両方
【対象】 JPFの政策・方針、プログラム、事業及びその他
【時期】 即時(Real Time)、中間、終了時、事後(1-3年後)
【基準】 妥当性、有効性、効率性、政策適合性、インパクト、継続性
【手段】 事業視察、関係者への聞き取り、文献調査等

JAPAN PLATFORM

日本の救援復興支援事業をどう評価するか
-JPFのモニタリング・評価方法と課題-

ジャパン・プラットフォームの仕組み

NGO、政府・企業など市民社会の主要なパートナーが、市長と共に進める取り組みです

JAPAN PLATFORM

世界の架け橋

JAPAN PLATFORM

日本の救援復興支援事業をどう評価するか
-JPFのモニタリング・評価方法と課題-

評価の基準

妥当性	目的が地域の復興や人道支援事業に合致しているか、実施の必要性を吟味して適切に、戦略的アプローチ、アワードをリア、費用対効果を高めているか。
有効性	JPFの理念や、価値観・行動原則、目的が達成されているか。
効率性	目的・手段と効率を投入した資源の結果として測る。一般的には、過去の実績や方法が採られたかを確認するため、同様の結果を達成するための標準値と比較する。
政策適合性	人道復興に限り、本意に配慮しているか。国連の持続可能な開発目標(SDGs)や、国連の防災プラットフォームの適合性。
インパクト	個人、地域・年代が他国、他団体、組織に与える社会的・経済的・文化・芸術的・社会的影響、想定された利益(ROI)による影響、マクロレベルなど。
継続性	組織やステークホルダーが人道復興活動が、その活動が、活動の継続を確保した活動の持続性があるか。また想定された結果(ROI)が持続的に続くか。

※必要に応じて一様基準を追加または削除する。

JAPAN PLATFORM

日本の救援復興支援事業をどう評価するか
-JPFのモニタリング・評価方法と課題-

JPF

NGO

JAPAN PLATFORM

日本の救援復興支援事業をどう評価するか
-JPFのモニタリング・評価方法と課題-

評価の際の課題

- 目に見えない、数値化出来ない成果をどう測るか
- 過去事業の評価で得られた学びの活用
- 受益者側からの評価の反映

JAPAN PLATFORM

日本の救援復興支援事業をどう評価するか
-JPFのモニタリング・評価方法と課題-

コメント 耐震補強の次に何を考えるか

山本直彦 奈良女子大学生生活環境学部住環境学科

東南アジア学会2010年度春季大会
震災と復興支援、2009年西スマトラ地震で
壊れたもの・つくられるもの

「耐震補強の次に何を考えるか」

コメント 山本直彦
(奈良女子大学生生活環境学部住環境学科・准教授)

タイ(トゥンソンホン地区)

バンコクを中心から北へ17km、1980's中頃完成

原構の鉄骨梁に注目 2F住家が、思ってたより、結がある

撮影: 田中真里正(群馬大学)

6m×6mの広さの
恒久住宅は今後ど
うなってゆくのか?

■増築されていく住まい
・住まいは自ら手を入れるもの
・ハウジングはプロセスである

■町並みはどうなって
いくのか?

結局どう増築されたか(タイ)?

撮影+出典: 田中真里正「タイの住まい」(国土書誌 2008)

バンダアチエの現場で

鉄筋コンクリート柱梁構造の桁梁(けたばり)

12年後の町並みはどうなったか(タイ)?

・1984→1996 皆同じような部屋の配列に

アチエ(スマトラ?インドネシア?)
では、
都市型の住まいのイメージが
無意識に
共有されているか?

ルアン・タム(居間)
カマル・ティドゥール(寝室)
ダブル(台所)

サイト・アンド・サービス事業

- ・1970's初頭 東南アジア各国で住宅公団
- ・1970's後半 スラムクリアランスの失敗
コアハウジングの開始
- ・世界銀行による積極的な融資
(タイ、フィリピン、エルサルバドル、セネガル、
ザンビアなどで実施)
- ・「水回り(トイレあり、台所なし)と最小限の居
室(コア)」を供給

第二部 流動性の高い社会における知の伝達と定着 趣旨説明

西 芳実 立教大学・AIIC

東南アジア学会総合研究大会(2010年6月5日、立教大学)
(「知の伝達・定着」と「流動性の高い社会」に関するもの)

第二部 趣旨説明

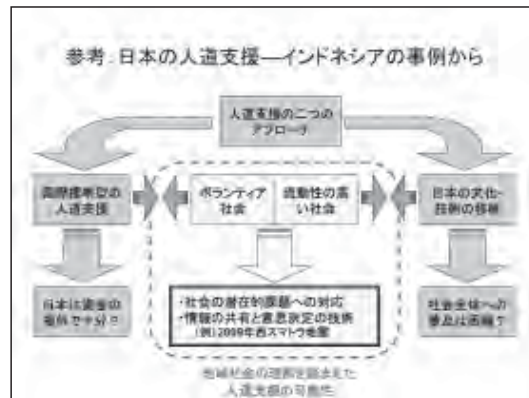
西 芳実
〔立教大学・AIIC・助教〕
nism@ikkyo.ac.jp

東南アジア研究の知見から

- 外部世界からの知の伝達・変容・定着に関する歴史研究の蓄積
(例)イスラム化とアタリ(環暹法)、属民地化と近代化、革命と国英形成
…在地社会の対応や在地の論理の折出に関心
- 人道支援の現場とそれをめぐる研究
外部世界からもたらされる知の伝達の場
人道支援の実務家…職務の担い手
研究者…貧困と開発、紛争・災害からの復興についての観察・記述
⇒知の伝達・変容・定着のプロセスの観察・記述
- 研究者はどこにいるか？

学術研究と人道支援

- 学術研究と人道支援をつなぐ
学術研究の課題や知見に即して
人道支援の現場で起きていることを位置づける
- アチェの経験:「アチェはやりにくい」との声
2004年スマトラ地震津波被災者復興支援事業
「元いた場所で元の生活で」を再建された家に入居しない人びと
「約束を破られた」
- 支援事業が前提とする社会像とのズレ？
固定的で自立的なコミュニティ像
⇒住居や生業を営むことで危機や困難に対応する社会
⇒流動性の高い社会における知の伝達をどうするか？



支援を見る眼

青山和佳 北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院

支援を見る眼

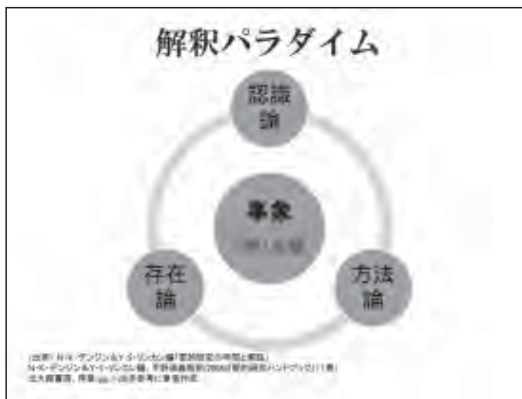
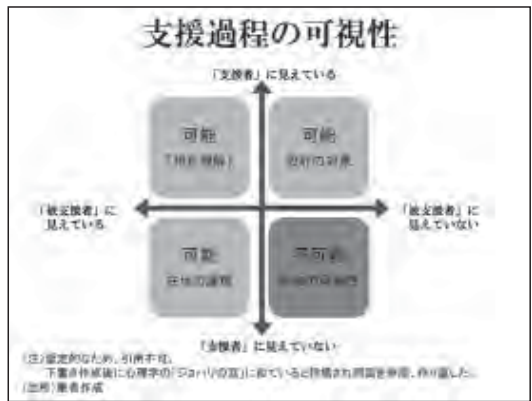
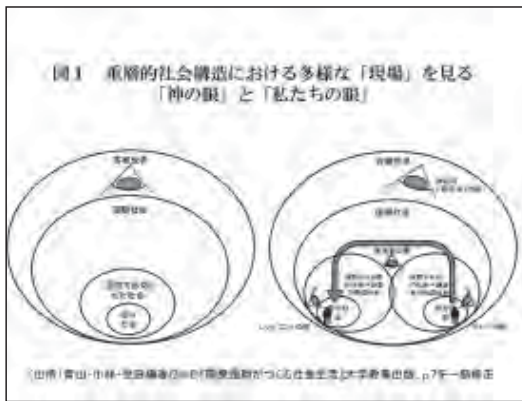
東南アジア学会2019年度春季大会 2019年6月6日(日) 北海道大学
パネル3 学術研究と人連支援
第2部 異文化の時代における知の伝達と定着
北海道大学大学院
メディア・コミュニケーション研究院 青山和佳
andrea@mc.kyushu-u.ac.jp

**支援の現場で生成する「知」を
どう捉えるか**

前提: 平時から存在する援助(支援)
→ 「始まりと終わり」は恣意的なもの

観点: 援助過程=複数の社会をまたがるつなひき
→ 知の伝達、知の創造の「場」

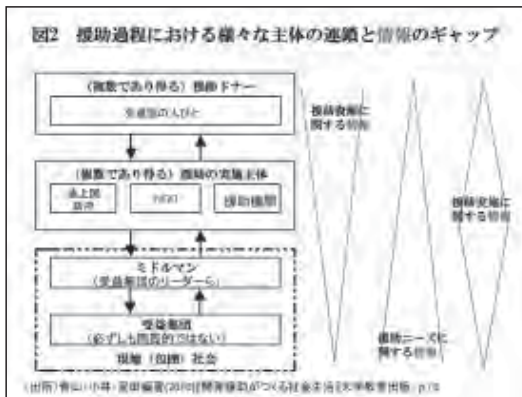
論点: 援助過程をどのように捉えうるか



■ **見えない支援過程の例**

災害脆弱性の克服(地域の安全保障)の観点

- ・「支援の波」に飲み込まれる自発的組織
- ・人びとの心理的变化
- ・取引費用変化と制度創出への影響



**まとめ: 支援の現場で生成する「知」を
どう捉えるか**

結論: 「支援を見る眼」はさまざま
→ 支援過程全てを把握することは困難

含意: 「自分の眼」の位置を相対化
→ 見えていないものへの想像力

提言: 他者からの情報発信への関心
→ 受信能力の向上(理解された情報は1/50)

コメント

服部 美奈 名古屋大学大学院教育発達科学研究科准教授

東南アジア学会 2010 年度春季大会
パネル 3「学術研究と人道支援:2009 年西スマトラ地震で壊れたもの・つくられるもの」
日時:2010 年 6 月 6 日(日) 午前 10 時 - 午後 4 時 20 分
会場:愛知大学豊橋校舎 5 号館 522 番教室

■パネル 3「学術研究と人道支援:2009 年西スマトラ地震で壊れたもの・つくられるもの」

■第二部 ■ 流動性の高い社会における知の伝達と定着

コメント 服部美奈(名古屋大学)

■ 西スマトラにおける知の伝達・受容・改編の歴史的展開

問い:西スマトラ社会が外部からの知を歴史的にどのように受容し、あるいは改編して、西スマトラ社会にとって「使える」形にしてきたのか。外部から知(制度・秩序・技術・思想)が持ち込まれたときに、どのようなコンフリクトが生じ、どのように解消されたのか。また、これらのプロセスと西スマトラ社会の流動性の高さとの関係はいかなるものか。

【西スマトラ社会の特徴】①基本的には新しい知に対して受容度の高い社会、②積極的な意味でコンフリクトが顕在化しやすい社会(力が局所的に偏在しない社会、社会的ヒエラルキーが緩やかな社会)、③男性の流動性が高い社会

一般的な特徴として、①母系制原理を基盤としたアダットとイスラームの共存、②タナ・ダタル、アガム、リマプル・コタという3つの内陸中核地域と、海岸地帯を含めた他のランタウ(周辺地域)という地域のなりたち

【イスラーム】

◆ イスラームとアダットの共存、イスラーム改革思想受容の歴史

18 世紀末から 宗教改革運動としてのバドゥリ運動

1821 年から 1837 年 バドゥリ戦争

20 世紀から エジプトのムハンマド・アブドゥラの影響を受けたイスラーム改革運動

イスラーム到来以前「アダットは適切さと妥当性に基礎を置く」→イスラーム到来後「アダットはイスラームに基礎を置き、イスラームはアダットに基礎を置く」→バドゥリ運動後「アダットはイスラームに基礎を置き、イスラームはキタブラ(クルアーン)に基礎を置く」

*アダットに対するイスラームの優位な関係、同時にアダットは普遍的なイスラームによって完全なものに

*論争点 財産の所有・使用権の形態、家庭・夫婦の性役割・親子関係をめぐる相違

西スマトラは新しいイスラーム改革思想を蘭領東インドの他の地域に浸透させる上で最も重要な役割を果たした地域の一つ

改革派の優位とダレカット(神秘主義教団)の衰退、独自の自律的な組織による社会活動

今日の日常的な場面でみられる知の受容と改編の例として、通過儀礼(ミナンカバウ的な要素とイスラーム的な要素の混濁)、呪術(病気治癒、悪魔祓いの際の呪文)。

◆ コンフリクトの発生と解消

アダット、イスラームそれぞれの立場からの解釈と論争

男性の場合、ムランタウの慣行を利用することで、過度な衝突を回避(ミナンカバウ社会の外からの発信、折り合いがつかないときにはミナンカバウ社会を出る、もしくは帰らない。ママックとしての役割は残っていても。) ◆ 流動性の高さ結びついている

東南アジア学会 2010 年度春季大会
パネル 3「学術研究と人道支援：2009 年西スマトラ地震で壊れたもの・つくられるもの」
日時：2010 年 6 月 6 日（日）午前 10 時～午後 4 時 20 分
会場：愛知大学豊橋校舎 5 号館 522 番教室

【学校教育制度】

◆ 西洋的知識、学校教育制度の受容の歴史

1909 年 バダックにスコラ・アダビアという最初のマドラサが設立
1910 年 フォルト・ファン・デル・キャペレンにマドラス・スクールを設立
1915 年 デニア・スクール設立

マドラサとよばれる新しい形態のイスラーム教育機関の設立・普及、スラウの変容
当時、最新といわれた知識やシステムを導入。新設科目として、新しいキターブ、地理学、オランダ語、簿記、生物学など。

- * 西洋的な知識や制度をそのまま受容するのではなく、イスラーム的価値と融合
- * 社会的上昇・立身出世の一つの手段として、オランダ植民地政府立の学校やマドラサを活用

→ ◆ コンフリクトの発生と解消 ◆ 流動性の高さとも結びついている

■ 被災と復興の現場で得られた情報から、学術的な研究を発展させる可能性

問い：西スマトラ社会の理解を深める上で、支援の現場の情報を見ることは、どのような意味で役に立つか。支援の現場で生じていることは、平時の西スマトラ社会の様子から想像できる範囲のことか。あるいは、平時の西スマトラ社会について知っていること、支援の現場で生じている謎にどれくらい答えることができるか。

【結論】①被災・復興の現場は、研究にとっても豊かな情報を提供しうる場、②平時の西スマトラ社会の縮図が現れると同時に、予想していなかった重要なアクターが出現することで、既存の社会構造・人間関係に変化をもたらす、③ライフラインの構造や村のなりたち、社会構造や社会的人間関係の特徴を、「ある程度」知っておくことは必要である。しかし、固定的な知識を持っていると、逆にそれに縛られてしまう危険性もある。つまり、「動くべきアクター」を最初に想定してしまうことのマイナス面もある。

◆ 研究にとって興味深い点

- * 支援の現場は生死に結びつくという点で、平時に保たれている「建前」が崩れる「本音」が出やすい場であるといえる。緊急の場で動く人（動くことのできる人）は、西スマトラ社会のなかで、平時はどのような立場にいる人々か。氏族で権力をもつとされるダトック、女性がどのように動いたのか、そこで発生しているジェンダー関係はいかなるものか。また、西スマトラ社会が流動的に動く人々をどのように捉えているのか。行政・コミュニティ・個人の動き方、連携の仕方をみること。
- * 支援・復興が、緊急型から長期型に移行する際、どのような人々がキーパーソンになっていくのかを時間的推移でみること。

◆ 知の定着・伝達の困難性

- * 地理学上のどこかに知を定着させ、伝達、保存するより、移動性に対応するネットワーク型の媒体を使うことの有効性。しかし、一方で個人が常に情報を保持するのではなく、少なくとも電子媒体上で記録・書き残していく作業も重要ではないか。

コメント

山田直子 東北大学

西スマトラ社会における 「知」の受容・伝達

- 20世紀初頭外来の「知」が流入する中で、現地社会がどのように議論し、解釈を加え、取り込んだのか？家族や婚姻を中心に
- 2つの事例 * イスラーム法(婚姻)
* 西欧的価値・倫理(家族)

事例2: 西欧的価値観の影響

- 西欧近代の価値観や倫理観の流入
- 進歩とは何か？という議論の中で、夫の妻や子供に対する責任感の欠如が批判の対象となる
- ミナンカバウの母系制社会では、妻と子供に対する扶養の義務は妻の兄弟であり、夫ではない。夫は「牛の尻尾にとまるハエ」
- アダットそのものへの批判ではなく、男性の道徳的義務の強調

事例1: イスラーム法の受容

- イスラーム法16世紀末から浸透
- 基本的に妻は離婚請求の権利を持たない(例外に対応するための、条件付けは一部の法学派では存在する)
- 妻側から離婚契約の解消ができない=母系制社会を維持できない
- 1930年代の婚姻証明書
「夫が海路6ヶ月、あるいは陸路3ヶ月以上の旅に出た場合、もしくは3ヶ月に渡って生活費を与えなかった場合は、妻がモスクの役人と面会して1回の離婚が成立したとみなす」

事例2: 西欧的価値観の影響②

- 村落社会での核家族化が進み、男性の妻や子供に対する扶養の義務も認識されてきた
- しかし、母系制社会の基本原則は維持
- 外来の規範や価値観を、自らのアダットと矛盾させずに共存させている

事例1: イスラーム法の受容②

- 当時のセンサスー西スマトラの離婚率高い
- 結婚と離婚を繰り返す慣習を妨げないかたちでイスラーム法を適用
- アダットと矛盾するイスラーム法を拒絶するのではなく、現地社会の文脈の中で改編し受容
- イスラーム法が解釈の余地を残しているために可能となったとは言え、本来の意図とはことなるかたちでイスラーム法が適用されたことを示している

まとめ

- 母系制社会の基本原則(世襲財産)は形をとどめ、それ以外については状況に応じて変化
- 村落社会の「柔軟性」と「適応力」
- 経済状況、地勢、変化する価値観や倫理観を現地社会の文脈で解釈、最も望ましい形で導入
- 流動性の高い社会であるが故の特質

コメント

石井正子 大阪大学

